

エネルギーという枠組みにおける原子力の認知 (2) ワークショップを通じた原子力認知の変遷

Perception of Nuclear Power in Terms of the Energy Choice

(2) Change in perception of Nuclear Power through the Workshops

*竹中 一真¹, 木村 浩¹, 神崎 典子¹

¹NPO 法人パブリック・アウトリーチ

本研究では、将来のエネルギー選択という文脈の議論において、人々に原子力がどのように認識されていくのかを分析する。本稿では、アンケートを分析することで、参加者の原子力の認知がどのように変遷していったのかを明らかにし、1つのケーススタディとして示す。

キーワード：エネルギー選択, 原子力認知, ワークショップ

1. アンケート設計と実施

参加者7名に対し、事前詳細アンケート、ワークショップの各回終了後の簡易アンケート（全7回）、事後詳細アンケートの計9回のアンケートを実施した。アンケートでは主に将来の電源構成に関する意見を把握するために、「3E+S」の優先順位や将来の電源構成の希望などについて質問している。これらの質問項目とアンケートの自由記述を合わせて分析することで、参加者の原子力認知の変遷、および、変遷していった理由を分析する。

2. 「3E+S」の各観点が原子力認知に与える影響

第2回～5回のワークショップは「3E+S」の各観点から参加者に情報提供を行った。図1には各回を通じて、参加者の希望する2030年の原子力発電の割合がどのように変遷していったのかを示している。第2回は経済性がテーマであり、希望する原子力割合に概ね増加傾向が見られる。原子力のコストの優位性を理解したことや新エネルギーへの過度な期待に気づいたことが変遷の理由として挙げられる。第3回はエネルギー安定供給がテーマであり、原子力の資源量の豊富さを理解し希望する原子力割合を増やした参加者と、化石燃料枯渇の心配が解消され火力割合を増やし原子力割合を減らした参加者がいた。第4回は原子力の安全性がテーマであった。参加者の理解は総じて深まっている様子だったが、希望する原子力割合の変化は様々であった。第5回は環境適合性がテーマであった。原子力発電の1つのメリットとして話されることの多い観点であるが、希望する原子力割合に大きな増加傾向は見られなかった。

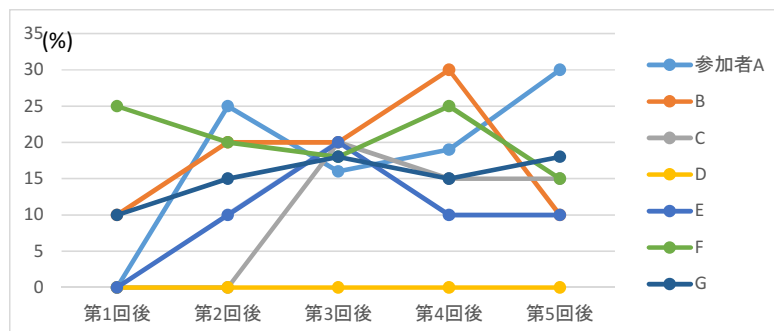


図1. 2030年の原子力発電の割合に関する各参加者の希望の変遷

* Isshin TAKENAKA¹, Hiroshi KIMURA¹ and Noriko KANZAKI¹

¹Public Outreach, Non-profit.